

秋山美紀研究会

ヘルスコミュニケーションと地域医療ワークショップ合宿の報告

2012年2月2日～2月3日 於：福井県大飯郡おおい町名田庄

保健・医療・福祉が一体となって住民を支える「名田庄モデル」を学ぶために、2月2～3日、福井県おおい町名田庄にてヘルスコミュニケーション研究会の合宿を行った。研究会に所属する学部生ほぼ全員が参加して、有意義な学びを得ることができた。

大雪のため、行きの交通機関が大幅に乱れ、全ての行程を当初の予定通りに実施することができなかったものの、限られた時間を最大限使って、来年度につながる実りあるセッションを行うことができた。以下、期間中に行った各セッションの概要を報告する。

● 1日目：2月2日

**14:00～16:00 来夏に鶴岡で行うワークショップに関する打ち合わせ**

2012年夏に山形県鶴岡市で開催予定のワークショップについて打ち合わせを行った。鶴岡ワークショップは、秋山研究会の学部生が、現地のからだ館がん情報ステーションとの共催で、昨夏まで3年連続で小学生を対象に企画・開催してきたものである。昨夏までのイベントを経験してきた4年生が、どのようなワークショップを開催してきたのかを、写真等を含むスライドを用いて下級生に説明した。まだ経験したことがない下級生も雰囲気や内容を具体的に理解し、来年度の夏休み中のワークショップのイメージを考えることができた。2012年夏の鶴岡のワークショップについては、2012年度の研究会サブゼミで引き続きテーマの絞り込みと準備を行っていく。

**18:00～22:00 地域医療懇談会**

名田庄診療所所長の中村伸一医師を招き、地域医療の実際についてのレクチャーを受けた。懇談会には中村医師の他に、実習中の自治医科大学の医学生も参加した。地域住民の暮らしの場である在宅を基点にした医療は保健行政や福祉と一体となってすすめる必要性が理解できた。実際に地域医療を行っている方の生きた話と質疑や意見交換ができたことで、学生達は学習や研究活動を行う上で大きなヒントを得られたと思う。

その後、研究会に所属する小島一輝（4年）が、宮城県の南三陸町で行った被災地支援活動の報告を行った。宮城県の在宅緩和ケアを推進しているクリニックを拠点に行った被災者支援活動の報告からは、我々大学生にも多くの役割があること

など、気づきを得ることができた。

● 2日目：2月3日

**8:30～9:00 保健福祉総合施設「あっとほーむいきいき館」見学**

名田庄地区の保健福祉総合施設「あっとほーむいきいき館」を見学した。保健所の支所、国保診療所、デーサービスといった住民が利用する保健・医療・福祉のサービスがワンストップで利用できる拠点である。料理教室を開催できる大きな調理室、活動ルーム、高齢者用の入浴場も併設されており、常に地域住民が利用している。壁や床などには国産の木材がふんだんにつかわれており、安らげる空間になっている。いわゆる医療施設らしくない建築には、設計の段階から中村医師が関わっていたとのことで、動線の工夫や配色へのこだわりが見られた。

**9:00～12:00 4年生卒業研究発表セッション**

秋山研の4年生（計12名）が、各自の研究発表の報告を行った。このセッションは、4名ずつ計3回のパネルディスカッション形式で進めた。流れとしては、4人が各12分ずつ卒業論文の内容や大学生活を振りかえるプレゼンテーションを行い、それを踏まえた質疑をフロアにいる在校生がパネルディスカッション形式で行う、というものだった。

卒業論文を書き上げた4年生の想いのこもったメッセージを多く受け取り、今後在校生が研究会で活動するにあたってのモチベーションが上がったと感じる。診療の合間に中村医師と研修医3名も参加してプレゼンテーションを聞いてくださり、とても有意義なセッションになった。

**13:00～14:00 在校生セッション**

合宿の締めくくりは、在校生（計16名）が各自の研究計画と今後の抱負を発表した。個人研究の内容や、プライベートの話を含んだ各個人それぞれの決意表明は、来季の研究会を楽しみにさせるものばかりだった。

今回の合宿の大きな目的のひとつは、来年の夏に鶴岡の小学生を対象に行うワークショップの内容を計画するというものだったが、それを考えるにあたり、地域医療・被災地支援・各個人の卒論は、大きなヒントになり得るものばかりだった。この合宿での学びを、来季の研究会に活かしていきたいと思う。